

[思い出の舞台から]

## 「五月革命」の頃のフランス演劇

伊藤 洋

(日仏演劇協会副会長・早稲田大学名誉教授・前早稲田大学演劇博物館館長)

今年はパリの「五月革命」(1968年)からちょうど40年目、日本でもフランスでも記念の行事が行われた。

ぼくはあの時パリで博士論文を完成させようと懸命だった。5月のある日ソルボンヌに行ったら、占拠していた学生を警官たちが警棒で殴りつけ、血だらけのまま猛烈な勢いで引きずり出している光景にぶつかった。「聞きしに勝る荒っぽさだな」と驚愕し、滞仏3年、初めて見聞きした *matraquer* なる単語をいやおうなく覚えさせられた。

ところがその翌日から労働者の団体が警察の行き過ぎや大学の対応を非難し始め、やがて「労働者は学生と連帯する」として、5月13日から6月6日まで25日間も続く長いゼネストが始まった。交通機関はもちろん、新聞ラジオも停止、銀行もガソリンスタンドも各種の店舗も全部閉鎖、街にはごみが溢れた。カルティエ・ラタンでは毎日デモ行進、いつの間にか反政府運動にもなり、プール・ミッシュの敷石がはがされ、火炎ビンや催涙弾が飛び交った。これが社会や文化の変革まで巻き込んだ「五月革命」だった。

電気、ガス、水道だけは確保され、大学都市の学生寮に住んでいたぼくは幸い食堂が閉鎖されずにいたから飢え死にせずに済んだが、街に住んでいた友人たちは食べ物もなくなり外国などに急遽避難していた。ぼくも友人たちと一時南仏に避難(?)したことはあったがパリでほとんどを過ごし、「外国人留学生は強制送還される」など流言蜚語が飛ぶ中で、チラシやパンフレットを読み情勢を見極めようとしていた。

諸種の劇場も閉鎖されたが、オデオン座だけは占拠されたのち、人々が自由に出入りできるよう開放された。これがのちにマルロー大臣によって、バローがくびになる原因となったのだが。このオデオン座では以前から諸国民演劇祭(テートル・デ・ナシオン)が開かれており、66年にはバローに

よってポーランドからグロトフスキの演劇実験室が招かれ、カルデロン原作の『不屈の王子』が上演された。これは大きな箱型の舞台を劇場内に別途作り、観客はその箱の上から覗き見る芝居で、言葉は少なく、叫び、うめき声が主体の衝撃的なものだった。67年のリビング・シアター『アンティゴネー』(ソポクレス原作、プレヒト脚色)の特別公演(パリ大学講堂)も若者の熱狂を呼んだ。

一方、66年に見た『自動車の墓場』(アラバール作、ガルシア・ロルカ演出)では、観客を囲い込んで抜け出させないまま、大音響の中で周りの舞台を役者が走り回る、かなり暴力的な芝居もあった。68年初めにはサーカス小屋を使った太陽劇団の『夏の夜の夢』(シェイクスピア作、ムヌーシュキン演出)の、役者が毛皮を敷き詰めた斜面をコロコロと転がり出てくるなど当時としてはアイデア溢れる斬新な舞台も印象に残っている。

これらの芝居が起爆剤となって、「想像力に至上権を！」とのスローガンを掲げた「五月革命」が起きたとも言えるのではないか。フランス演劇はこの頃を境に、「言葉の演劇」の見直し・解体が進み、「肉体の演劇」へと傾斜していったのである。

渦中にいた時には、これほどの歴史的イベントとも思わず、博士論文が出せなくなって困ったとの思いが先にたっていたが、まさしく凡夫の浅ましきだった。あとで考えれば、社会的にも文化的にも看過できない歴史上の大転換点に立ち会っていたのである。

帰国後、ちょうど荒れ始めた日本の大学紛争の際に、学生相手の交渉役(学生部長)に狩り出されることになったのはその余波だったのかもしれない。